

七 島 蔦 菴 甲 病 に 関 す る 研 究
第 2 報 本病に対する抵抗性の品種間差異 (概要)

藤川 隆*・宇都宮 務²・岡留善次郎*

FUJIKAWA, T., UTSUNOMIYA, T. & Okadome, Z. Studies on the Browning
of Chinese Matgrass

(2) On the Varietal Resistance of Matgrass to the Disease

著者等は先に本病の発生と栽培法との関係について報告したが、今回は 1954~1955 年の 2 ヶ年間にかけ七島蔦菴甲病に対する抵抗性の品種 (系統) 間差異について実験を行つたので、その概要をのべ詳細については紙数の制限上別に報告することにする。従来七島蔦菴の品種に関しては判然たる決定を与えたるものはなく、唯実用上大粒種 (大七島、大柄)、中粒種 (中七島、中手)、小粒種 (小七島、小柄) に区別されておるがその特質については、学理的に決定されておらないので、ここでは大分県における奨励品種 (系統) を

中心として本研究を展開した。なお実験材料を提供された大分県杵築市蔦業指導所紀所長に対し感謝の意を表する。

先ず実験方法としては 6 品種を使用し圃場栽培とし 1954 年は 5 月 27 日移植し、肥料は反当堆肥 300 貫、硫安 15 貫、過石 15 貫、塩加 2 貫を全量基肥とし、1 区 2 尺平方 4 区制の乱塊法でその間の管理は充分に行つた。発病調査は第 1 回を 6 月 17 日に以後 10 日おきに 26 日、7 月 6 日、16 日、26 日と数回行い最後の刈取調査は 8 月 5 日に行つた。次に 1955 年は 5 月 25 日移植し肥料は硫安 15 貫、油粕 20 貫、過石 15 貫、硫

* 大分県農業試験場

加 2 貫を全量基肥として施し、1 区 3 尺平方の 4 区制の乱塊法とし、6 月 30 日と 8 月 11 日 BHC (3%) 粉剤を撒布して害虫を防除した。発病調査は第 1 回を 7 月 22 日に、最後の刈取調査は 8 月 23 日行つた。ここでは兩年とも最後の刈取調査時の茎、枯死茎、苞、枯死苞の発病率 (%) と茎及び苞の発病指数 (%) 並びに草丈を示すと第 1 表の通りである。

収穫前並びに第 1 表の結果よりして、鼈甲病に対す

る七島圃の抵抗性の品種間差異は、発病初期には若干の差異が認められたが、末期においては台湾七島のみ発病少く、その他の大分 1 号、大分 2 号、大分 6 号、杵築在来、国東在来は発病極めて多くこれ等の間に判然たる差を認めることは困難であつた。即ち品質は幾分劣るが、抵抗性品種育成の場合台湾七島を採用することは、極めて有望であると考え。 (1955 年 11 月 1 日稿)

第 1 表 七島圃鼈甲病に対する抵抗性の品種間差異 (4 区平均)

年 度	調査事項 供試品種	発 病 率 (%)		発病枯死率 (%)		発 病 指 数 (%)		草 丈 (cm) 刈取時調査
		茎	苞	茎	苞	茎	苞	
1954	1 大 分 1 号	40.4	82.7	11.3	47.4	30.6	61.4	86.6
	2 大 分 2 号	40.6	80.7	13.1	47.7	32.1	59.7	83.5
	3 大 分 6 号	48.4	84.4	15.4	56.4	37.9	67.7	77.1
	4 台 湾 七 島	13.0	56.0	3.4	25.9	9.9	37.2	86.7
	5 杵 築 在 来	43.8	80.4	12.9	50.6	34.5	62.5	81.6
	6 國 東 在 来	40.7	81.3	12.0	51.8	30.8	63.0	83.8
	有意性(処理間)	**	**	**	**	**	**	*
1955	1 大 分 1 号	32.7	67.8	17.1	49.0	27.0	57.2	74.7
	2 大 分 2 号	32.2	65.3	17.5	52.0	26.6	58.0	67.3
	3 大 分 6 号	34.5	60.3	13.8	43.2	27.3	49.8	65.9
	4 台 湾 七 島	7.5	48.0	3.3	25.9	6.2	36.4	78.2
	5 杵 築 在 来	29.9	67.1	15.9	49.1	24.5	57.6	71.8
	6 國 東 在 来	29.0	65.9	17.2	47.7	25.1	56.7	74.6
	有意性(処理間)	**	**	**	**	**	**	**

備考 $F_{15}^5(0.01) = 4.56$, $F_{15}^5(0.05) = 2.90$.